

竹内泰宏

少年たちの

戦争



少年たちの
戦争

竹内泰宏

河出書房新社



少年たちの戦争

©一九九一

一九九一年七月二五日 初版印刷

一九九一年七月二五日 初版発行

著者 竹内泰宏

発行者 清水 勝

発行所 河出書房新社

〒四東京都渋谷区千駄ヶ谷二―三二―二

電話 〇三―三四〇四―二〇一営業

〇三―三四〇四―八六一編集

振替 東京〇―一〇八〇二

印刷 三松堂印刷

製本 小泉製本

落丁・乱丁本はお取替えいたします

定価は帯・カバーに表示しています

Printed in Japan

ISBN4-309-00704-X

竹内泰宏（たけうちやすひろ）
一九三〇年東京生まれ。東京大
学経済学部卒業。一九六八年、
『希望の砦』で河出長篇小説賞
受賞。著書に『人間の土地』
（上下）、『視点と非存在』、『想
像的空間』、『境界線の文学論』、
『アジアのなかの日本文学』、
『アジア・アフリカの文学と心』、
『第三世界への想像力』などが
ある。

目次

第一部

1章 鋸屋根の下で 7

2章 樋口邦男 52

3章 踏切りのこちら側 91

4章 月光の下の盗賊たち 117

第二部

5章 四月十三日夜の記録 149

6章 遠くからの手紙 179

7章	二つの神社	237
8章	百年の邂逅・明日に…	288

第三部

9章	性と死と、朝と	316
----	---------	-----

10章	そして明日	345
-----	-------	-----

11章	焦土の飛翔——続・そして明日	383
-----	----------------	-----

Note
431

装画 三上 修
装幀 田村 義也

少年たちの戦争

1章 鋸屋根の下で

1

動物たちは生きているあいだと同様、死んだ後になってからもそれまでよりいっそう重くてやっかいな荷物を一部の人びとに与え、背負わせる。それも、たぶん動物たちがその生存中にも増した利益を、死後になってからも人間たちに与えつづけるためにだ。汚点ひとつなく磨かれた一枚のガラス板ごしに眺めるデパートのショウケースのなかの高価な毛皮や、テーブルの上で油を滲ませいい匂いをたてるロース身の焼肉など、人間たちが毎日着たり、食べたりして寒さを防ぎ、腹をふくらませるこれらのものたち——どんな化学製品もおよばないほど、しなやかで弾力のある組織に包まれたこれらのものたちも、もとはといえ血の通った生命も息もある被造物だ。だが、それらがほとんどひとつ残らず無理じいに生命を奪われる瞬間をとおってぼくらの身のまわりにあることを、どれだけの人が自分の経験のなかから思い浮かべることができらるだろう。——ぼくは十六歳のとき、死を前にした動物たちと、かれらをとり囲む人びとの姿を垣間見たが、そのとき以来、ぼくは自分の人生のなかで、どんな運命を前にしてもたじろぎを感じないほど、ある親しみのある束縛されたものの姿とその存在を自分の心の底に認めるようになった。その抱いている広びろとした自由な大地への渴望とともに。

その建物は、三方を灰色のコンクリートの塀に囲まれ、赤錆があばたのように浮きだした屋根を明り

とりの窓の上に鋸の刃のように空にむかって張りだした恰好で、だだっ広い埋立地の広場の端に建っていた。国電のS駅のホームを降りて、おびただしい線路の下に掘られた長い地下道をくぐりぬけ、光の射してくる小さな出口からふたたび地上に出ると、かすかに海風の吹いてくる平坦な埋立地の上に、まるで大型の物置小屋か使いふるされた屑鉄かなにかの倉庫のように、その建物はぼつんと建っていたのだ。

毎朝、朝日があたると屋根の上のガラスの欠けた明りとりの窓は、そこひにかかった眼のように光った。その光は建物のすぐ脇までのびている引込線の線路の上や、そこに停車している黒ずんだ有蓋貨車の車体に滑り落ちて、塀に囲まれた地所一面に神秘的なカビのような影をつくりだすのだったが、埋立地の先の海から吹いてくる風はそのあいだもかすかな潮の匂いを鼻先に運んできて、ぼくらにそこが東京という大都会のはずれであることを思いださせた。その建物のそばにあるものといえは、おなじ埋立地のはるかさきに、当時ぼくらの通っていた電気会社の工場が、対空擬装のために黒と白のあらい縞模様様の迷彩ペンを塗りつけられて、押しつぶされた虫籠のように見えているだけだった。

ぼくらは鋸状の屋根をもったその建物について、そこがなにをするところか、どうしてそこに建てられたのかなどを、毎日その脇を通過して電気会社の工場のほうへ通うときや作業のあいまに、遠くから眺めながら話しあったものだ。だが、その建物の呼び名は人によってまちまちだったし、結局その建物がずっと以前に街なかからこの埋立地に移されてきたのだということのほかは、だれもよくは知らなかった。それも、みなが聞き伝えをもとに勝手な想像をまじえていろいろな説をのべたてていたので、実際のところぼくにはどう考えていかかわからなかったのだ。ただ、いまでもはつきりしていることは、その建物が大勢の人たちが通勤する駅のホームから一本の長い地下トンネルを潜りぬけてきただけなのに、人びとや街からひどくかけ離れた感じのする場所にあったことと、鋸型をした屋根の下や、破れかけたコンクリートの囲いのなから、ときどき張りつめた空気を破るような鋭い動物のなき声が聞えて

きて、同じ埋立地に建っているN電気工場の倉庫へ作業しに通うぼくらを驚かせたことだった。

「荷がとどいてるぞ！」鉄棒に太いゴムタイヤのついた大型のリヤカーを曳きながら樋口邦男が言った。その声がぼくを朝からつづいてきた睡気からひきだした。長く曲りくねった地下のトンネルから出たばかりの眼に、朝の日射しがまぶしくあたり、睡眠不足の眼底を刺した。もう四月にはいったというのに、昨夜から襲ってきた季節外れの寒波でひどく冷えた空気が頬に触れ、前を歩く樋口の吐く息が白く見えた。樋口の曳いているリヤカーの荷台には、脂で黒光りする分厚い板で造られた重々しい木の箱が、頑丈な蓋を閉ざしたまま、しっかりとつくりつけられていた。中味は空なのでまだ重くはなかったが、ぼくは脂の浮いたその箱に手をかけて力まかせに押ししながら、樋口の背中ごしに鋸屋根の建物のほうを見た。

「大物だよ」リヤカーの梶棒をひきつけながら樋口が言った。

「大物って？」

あれを見ろよ、というように樋口が黙って片手をあげた。かれの着ている中学生服は、ぼくのと看ように肘や膝がすり切れてカーキ色の布地の色が褪せ、両脚に巻いているゲートルも布の端がほつれて糸が紐のように垂れている。

樋口の指さす先には、引込線のレールが目を浴びて鋭い光を撥ねあげていたが、その一番手前にあるレールの上の昨日までなにもなかった位置に、四五台の黒ぐろとした有蓋貨車が停車していた。枠のついた貨車の屋根に蔽われた暗がりのなかでは、牛に似た黒い動物たちのかげが動いているように見えたが、遠くてよくは見えなかった。光のしぶきをふりはらうようにぼくは瞬いた。朝のまぶしい光が、ゆうべ一晩に二回も出た空襲警報のために眠りを妨げられたぼくの視界を邪魔しているのだった。《大物って、牛のことか……》

「急ごうぜ」樋口が言って勢よくリヤカーをひっぱったので、ぼくもあわてて前こごみの姿勢でリヤカーを押し、引込線沿いに埋立地の凸凹した地面を大股に歩いた。ぼくには、今朝これからおこることがよくはわからなかった。だがそれはここひと月ほどつづいてのことでもあった。つい一ヵ月ほど前までは、ぼくにとって時というものは地面にしっかりと根を張った一本の樹木に吹き当る風のように、手で触ることのできるほどはつきりした流れを感じとることのできるものだった。しかし一ヵ月前の空襲で、ぼくの下宿していた叔母の家が周囲の街といっしょにすっかり焼けてしまつて以来、焼け残つた小学校に設けられた罹災者施設に一人で寝泊りして動員作業に通つてゐるぼくには、日々の出来事は行きあたりばつたり流れはじめ、時もまた根を失つて漂いだした樹木にとつてのように、前後もなく流れはじめたかのようにだった。

金屬的な動物のなき声、透明で冷たく張りつめたガラスのような大気を破つて尾をひき、突然朝の静けさを破つた。その声は、行手のコンクリートの塀のきれめからのぞける、丸太を組んだ柵のなかからたちのぼつたのだ。柵のなかでは数十頭の豚が汚れた背中をならべていて、水と泥でこわばつた粗い毛のあいだからのぞいているピンク色の皮膚を隣の豚の皮膚とぶつけあつて、頑固に押しあつてゐるのだった。

別の柵のなかでは、七八頭の黒い和牛の背中が、艶やかに光る濃褐色の毛並みのゆるやかな波をつくつて動いてゐた。近づくとき、頑丈な柵のなかに閉じこめられた和牛たちは、前脚の蹄でときどきもどかしそうに湿つた地表を蹴りながら、柵の横棒に盛りあがつた肩や、骨のとがつた尻の皮膚を押しつけてゐた。生体特有の酸っぱくて厚ぼつたい匂いが鼻先に漂つてきた。

その塀のなかにはいつたのははじめでだった。樋口について牛の柵のそばを通りぬけると、仲間の牛と身体を寄せあいながらぐいと首をひねつてぼくを見返した、一頭の和牛のまるい大きな眼がぼくの視線とぶつかった。赤い縁よちのなかをぐるりと動いてこちらを見た牛の眼は、桜色の臉に一本一本刺さつた

ブラシのような長い睫毛のあいだからぼくの顔を眺めた。かすかにうるんだ大きな瞳は、自分に近づくと二本足の少年の姿に警戒しながらも、逃げることも援けをもとめることもできないで、ただこちらの一举一動をじっと眺めているように思われた。そこにはぼくが想像できるようなこれから自分の身におこることへの怖れも抗議も見とれず、それでいて死に近い自分の運命を知っているようなあきらめと、かすかな非難が浮かんでいよう、ぼくは胸を衝かれた。

「空襲があったら大変だぞ。これだけの牛が暴れだしたら……」ぼくは樋口の背中にむかって声をかけた。ゆうべ貨車で着いたのだろうか、こんなに牛が集まっているとは思わなかったのだ。

「こんなだだっ広いところなら、大丈夫だよ。ここじゃ火に囲まれることなんてないだろうしな。直撃弾じゃだめだろうけど」

ぼくは一ヵ月前の下町の空襲で叔母の家が焼けたときのことを思い浮かべていた。たしかに怖いのは焼夷弾そのものよりも家屋の火災、いや街の火災で、強い風にあおられた炎に舐められてたちまち類焼していく建てこんだ家屋の舞いあがる炎の渦なのだ。

「でも小型機なら？」思いついてぼくは言った。「先遇むこうの国道で出くわしたんだぜ、ここへくるとき」

「あいつは機銃掃射をやるからな、P51は……」樋口が言った。

もし小型機があつた朝のようにこの建物や牛のいる柵を撃ってきたら……そう思うと恐怖を感じた。あのとき、この埋立地へくる途中の国道で、行手の電信柱と屋根のあいだから突然あらわれたP51 ムスタング（野馬）と呼ばれる黒い仔牛のような単発機は、異様な爆音とともに国道沿いの家屋の屋根をかすめて機体をかすかにかたむけたと思うと、機首をぼくの立ちどまっている路上にむけたのだ。道の端に掘られていた防空壕にぼくが飛びこんで伏せると、トタン屋根をハンマーで烈しくたたきつけるような機銃の音が鼓膜を痺れさせるのと同様だった。しばらくたって壕から出てみると、アスファルト

道路をミシンで縫ったあとのように二三メートルおきに機銃弾の掘り返した穴が点々とついて、ぼくの跳びこんだ壕の数メートル脇まで近づいていた。はじめて知った機銃掃射という代物は、それまで経験した大型機B29による高空からの焼夷弾の爆撃とはまるで勝手のちがう恐怖感をぼくに抱かせたのだ。「もうじき作業がはじまるぞ。いそがなくちゃ」豚の柵の脇へとリヤカーを曳きながら、樋口が馴れない場所たじろいでいる様子のぼくをうながすようにいった。

樋口の話し声をかき消すように、ふたたび疝高い豚のなき声がすぐそばでした。ぼくは柵のなかの一頭の豚が、隣の豚の耳たぶに噛みついていているのを見た。噛みつかれた豚は兇暴な仲間から逃れようとものがくが、狭い柵のなかではかの豚の身体に押しもどされて逃げられず、かじられる耳の苦痛に耐えられないようにまたもないた。よほどしつこく噛まれたとみえ、その豚の耳たぶはすでに根もとのほうがすこしちぎれて、乾きかけた血が固まってこびりついている。温和おとなしい豚になおも寄りそってその耳を噛もうとする残酷な豚とその犠牲者を、ぼくは痛ましい気持ちで眺めた。

そのとき建物から急ぎ足でできた作業着にゴム長をはいた背の高い中年の男が、樋口を見ると怒鳴った。「もうはじまってるぞ、邦男！」

ぼくはその男が、これから会わなければならぬはずのあの男、《山本の親方》でないことにほっとした。昨日見た山本の親方はこんなに背が高くはなかったし、その片脚は木の棒でも呑みこんだように不自由そうで動きが重かったのだ。それにぼくにとってどうしたって忘れられない、あのびんと張った八の字ひげも生やしていない……。

ゴム長の男はぼくらにはそれきり眼もくれずに大股で牛の柵のなかへ踏みこんでいき、牛の背中にホースで水をかけはじめていた。男の手にしたホースからほとぼしりする水の束をつぎつぎに浴びた和牛たちは、たちまちびしょぬれになって烏の羽のように黒光りする艶をおび、ならんだ牛の背中の上には湯気がたちのぼって、柵のなかを白い煙のように漂いはじめていた。ぼくは牛の身体というものが、そ

の生きた皮袋のなかにこんなにも熱を貯えているものだということをはじめ知った。

「仕事は建物の奥だよ。内臓分けは裏の入口からはいってやるからな」樋口がリヤカーの棍棒をぐいと曳き、ぼくの脚もとをふり返って見ながらつぶやいた。「……きみもできたら長靴を借りたほうがいいな。ゲートルがびしょ濡れになるからな。おれはリヤカーを裏口に置いてくるから、その入口をはいったところにある更衣所で待っていてくれないか」

「昨日の……山本の親方はそこにいるの？」

こんな場所ですら一人になる心細さから、ぼくは訊いた。

「おれにまかせとけて。山本の親方はいないかもしれないけど、この親方にもぼくはもう話してあるんだから……」樋口はぼくを励ますように微笑んで言った。教室であれほど温和しかった級友の樋口が、これまでになく頼もしく思えた。

ぼくはここまでできた以上、いまさら引き返すわけにはいかなないと観念した。樋口の後姿がリヤカーの荷台の上の木製の頑丈な箱といっしょに建物の裏の中庭のほうに遠ざかっていったとき、ぼくはタール塗りのトタンをぶちつけた建物の入口を眺め、樋口にいわれたとおりに思いきって近寄っていった。

建物のなかへ足を踏み入れたとたん、天井から吊るされている六七頭の豚の胴体が、ぼくの顔にぶつかりそうになった。鉤フックのついた鎖で天井から吊るされている六七頭の豚の胴体は、頭がなく、手脚の先も棒のように切り落されていて、皮を剥がれた胴体の肉が磨いた陶器のように光沢のある紅色がかかった筋肉をさらけだしていた。それはまるで熱湯からとり出したばかりのように生暖かい湯気に包まれていたが、その筋肉の一部が頭も内臓もないのにまだリズムミカルに動いていて、生命がその壊された組織に痙攣的な律動だけを残しているのだった。

刺すような酸性の匂いが鼻先に漂ってきた。その匂いは、生体の熱のたてる蒸気の温かさといっしょになって、空き腹で胃のあたりが空洞のようになったぼくの身体の芯までしみこむようだった。ぼくは

舌の上に生唾がこみあげてくるのを我慢した。威嚇するようにとりまいて、宙吊りになった肉の柱のあいだを駈けぬけるようにして、ぼくは樋口の言った部屋を探した。

火の消えた鋳物のストーヴを大小のベンチがとり囲んでいる小部屋がすぐに見つかった。ストーヴには火がついていなかったので部屋は冷えびえとしていたが、三四人の男たちが忙しそうに出入りしていた。作業着を着た若い男や、洗いざらして白く肌地の浮きだしたハッピを引っかけた脚絆くわばんばきの中年の男たちで、服装も年齢もまちまちだったが、ぼくがはいって来たことなど目にもくれない様子で、草履やズック靴を床にらんでいる長靴に履きかえ、衝立ついでに下げてあったナイフや棒ヤスリを腰に下げると、すばやく部屋から出ていくのだった。壁にはゴム引きの黒い前掛けや、木綿の作業衣がかかっていたが、それにはどれも点々とペンキの雫を浴びたように、乾いて褐色になった古い血の斑点がついていた。

才槌頭の目立つずんぐりした身体つきの五十がらみの男が部屋にはいつてきた。その男のあとにつづいて樋口も部屋にあらわれたので、ぼくは一瞬ほっとした。

「この小僧かい？」

男はぼくを靴の先から顔まで眺めると、樋口のほうにふりむいて言った。厚い臉のあいだにめりこんだようなその眼は小さく、柔和だった。だがその眼も酒焼けしたような赫ら顔も、笑っているのか怒っているのかわからなかった。作業着の下に長年の力仕事で鍛えたにちがいない厚い肩がのぞき、半袖の下からはみだした腕は材木のようなようだった。一分刈りに短く刈った白髪まじりの頭髮の正面はすでに薄くなっていて、人の悪くなさそうな丸顔に年齢のもつゆとりを感じさせた。

「お前と、たった二人かい？」いくらか失望した様子で男は樋口に言った。それから吐き捨てるように、「水撒みずまきでもさせるんだな、タタキ場で」

「タタキ場ですか？ この友達は山本の親方に頼まれて、内臓分けの手伝いをしにきたんですよ」樋